

現在のマラッカ



に改宗してメッカや南インドと関係を有することにあるとしている。サムドラの内陸部においては、さきにも述べたように、金をはじめ竜腦などが産出され、また南インドより移植された胡椒が栽培されるようになった。サムドラはこうした産品を輸出する港として繁栄し、西アジアや南インドからの商人を引きつけた。サムドラにとって、輸出品を産する後背地と、それを求めて商人がやってくる南インドやイスラーム世界との関係が重要であったことを、建国神話は如実に語っているのである。

この港市の繁栄により、その名称「サムドラ」が転じて、「スマトラ」がこの島全体を指す名称として用いられるようになった。そのためこの港市自体は、パサイの名で呼ばれることが多くなった。

マラッカ王国の建国神話

パサイの繁栄により、スマトラ産の胡椒や金、森林生産物を求めて来航する商人が多くなると、パサイに近くより波のおだやかなマラッカ海峡域の港が、ジャワや東部インドネシアの物品の入手も容易になるため、注目をあびはじめ

▼『ムラユ王統記』 王家の系譜を中心にマラッカ王国からジョホール王国初期までの歴史を記したマレー語の古典文学作品。一六二二年ジョホール王国で編纂された。マレー語古典文学の傑作と評される作品で、約三〇の異なる写本が現存する。

▼アレクサンダー大王 紀元前四世紀のマケドニア王で、東方遠征をおこないギリシア、エジプト、西アジアにまたがる大帝國を建設した。彼の超人的な活躍は、やがて伝説化され、イスラーム布教の英雄として西アジア世界に取り入れられた。

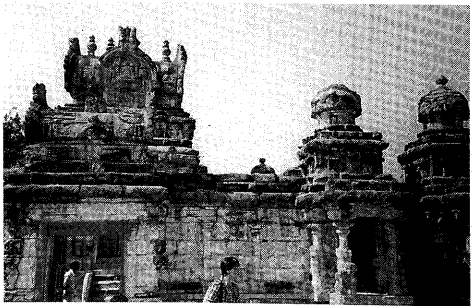
▼チョーラ 南インドのタミル地域に古代から十三世紀末まで栄えた王国。とりわけ十世紀終わりから十二世紀にかけて隆盛し、十一世紀にはマラッカ海峡域にまで影響力を拡大し、スマトラやマレー半島における南インド系商人の活動を活性化させた。

た。十四世紀終わりに建国されたマラッカ王国は、十五世紀後半からポルトガルに滅ぼされる一五一年まで、東南海洋交易の中継港として東南アジアで随一の繁栄を誇ることになる。マラッカ王国の由来を伝える『ムラユ王統記』(二六二年)も、マラッカ王家がスマトラの住民やマラッカ海峡の海上民と地元の原理にもとづき君臣関係を樹立し、そして対外的にはイスラームを受容して、その存在を確固たるものとしたことを語っている。

『ムラユ王統記』によると、王国の建国者はアレクサンダー大王の血統をもち、インドのチョーラ王と海の王の娘とのあいだに生まれた子どもの子孫であるという。それによれば、マケドニアのアレクサンダー大王は東方へ遠征し、インドの王ラジャ・キダ・ヒンディと戦い、これを制した。大王は、ラジャ・キダ・ヒンディの娘と結婚し、息子を設けた。大王はその後マケドニアに帰還したが、その子孫は、インドに残った。その一人ラジャ・チュラン(チョーラ王)は、全インドを勢力下におさめた。そしてさらに中国を征服するために、東方遠征にかけた。

シンガポールまで進軍したラジャ・チュランは、その遠征を阻止しようと中

カーンチーブラムのヒンドゥー寺院
(南インド、マドラス郊外) バッ
ラヴァ王国、チャウラ王国のもとで
ヒンドゥーの聖地として町が栄えた。



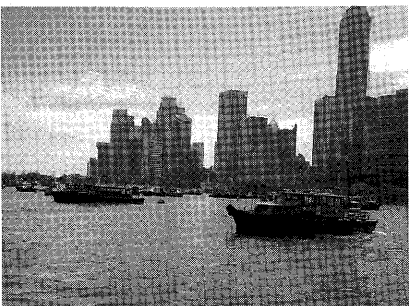
国からきた船の乗組員より、中国がまだはるかに遠いことを聞かされた。王は中国遠征をやめ、そのかわりガラス箱をつくらせ、それにはいつて海にもぐったという。海の底には海中の王国があり、ラジャ・チュランは海の王と出会った。ラジャ・チュランは、自らが地上の王であると告げると、海の王にむかえられ、その娘と結婚した。それにより、王には三人の息子が誕生した。ラジャ・チュランは、やがてインドに帰りたいむねを海の王やその娘に告げ、彼の息子たちを成人したあとに地上に送り返してくれるよう依頼した。こうしてラジャ・チュランはインドへ帰っていった。

成長したその息子たちは、その後海中から南スマトラのムシ川河口の町パレンバンの聖地ブキット・シグンタンに降臨した。三人が降臨したとき、その丘の頂上は黄金となり、稲穂は金粒となり、稲の葉は銀、茎は金銅の合金になったという。パレンバンの首長ドウマン・レバル・ダウンは、アレクサンダー大王の子孫を称する三人の降臨者をむかえ入れた。

やがて噂を聞きつけた周辺各地から、人びとが三人を表敬訪問にきた。これにこたえて、三人のうち長男は中部スマトラのミナンカバウの王に、次男は北

▼スリ・トリ・ブアナ マラッカ王国の初代王は、トメ・ピレスの『東方諸国記』や中国側の史料から、パレンバン出身のパラメスワラ(十四世紀終わり頃(一四一四))であることが明らかとなっている。『ムラユ王統記』にはこの名は登場しない。史実としてパラメスワラ一代でなされたことを、『王統記』はスリ・トリ・ブアナを含め五世代にわたる事業として、丁寧に展開している。

現在のシンガポール



マラッカ王国の建国神話

019

スマトラのマラッカ海峡岸の港市タンジュンブラの王にむかえられた。三男はドウマン・レバル・ダウンに遇されて、パレンバンの王にむかえられ、スリ・トリ・ブアナ(三界(水界・地上界・天界)の王)と称した。

スリ・トリ・ブアナはやがて、海辺に町をつくりたいとレバル・ダウンに打ち明けた。レバル・ダウンは協力を約束し、スリ・トリ・ブアナと一緒に海峡を渡りビンタン島に赴いた。ビンタン島を支配していた女王は、ブキット・シグンタンに降臨したスリ・トリ・ブアナを遇し、彼を養子としてむかえた。その後ビンタン島の女王の支援もえて、スリ・トリ・ブアナはさらに海峡をわたり、シンガポールにいたろうとした。海は嵐が起きて荒れていたが、海の王の孫となるスリ・トリ・ブアナは荒ぶる海を静め、無事シンガポールに上陸するこゝとができ、その地に町をつくったという。その後このスリ・トリ・ブアナの曾孫がマラッカの地に移り、マラッカ王国を建国したと『王統記』は伝えている。

アレクサンダー大王は、アラブやペルシアでは、イスラームを広めるために戦った英雄として語り伝えられていた。のちに西方イスラーム世界との交易が盛んになり、東南アジアのイスラームのセンターとしての役割を担うこととな

現在のプキット・シグンタンの入り



▼義浄(六三三～七二二) インド留学(六七二～六九五年)の途次、シュリーヴィジャヤに長年滞在。その地の仏教がインドと同じく高水準であることを記す。旅行記『南海寄帰内法伝』やインド求法僧の伝記『大唐西域求法高僧伝』の著作がある。

▼スメール山 インドの宇宙論において、宇宙の中心に聳えたと観念された山。その山頂には、ヒンドゥー教や仏教の神々の住居があると考えられていた。美称「ス」をとり、メール山ともしばしば呼ばれる。

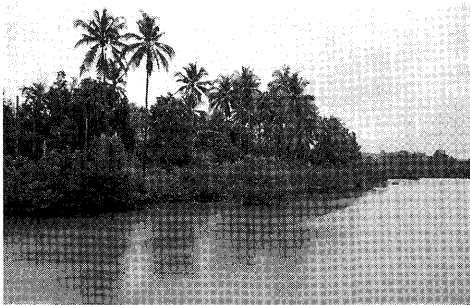
るマラッカは、アレクサンダー大王を王家の祖先としている。だが『王統記』は、マラッカ王家がアレクサンダー大王やチョーラ王の血統を引くと唱えるのみでなく、建国するまでにマラッカ海峡の海の女王と関係を形成してパレンバンに降臨し、人びとの尊崇をえてスマトラ島の要衝にその兄弟が王としてむかえられたとしているのである。

三者が降臨したパレンバンは古代海洋帝国シュリーヴィジャヤのかつての中心地であり、プキット・シグンタンはその聖地であった。シュリーヴィジャヤは、唐の仏僧義浄が七世紀後半にその王都を訪れたとき、一〇〇〇人以上の僧侶が仏教研究に励む、仏教が盛んな地であった。プキット・シグンタンは、シュリーヴィジャヤの人びとにとって、仏教という神々の住む宇宙の中心スメール山(須弥山)とみなされた場所であった。スマトラの人びとやビンタン島の女王は、スリ・トリ・ブアナたちがここに降臨してきたことから、彼らに敬意を表したのであった。

パレンバンはスマトラならびにジャワの産品を集荷して繁栄した港であり、ミナンカバウはスマトラ中部の金や森林生産物の主要産地で、タンジュンプラ

▼海上民 船上生活を送り、船で移動しながら漁業や海産物の収集に従事した漂海民のこと。マラッカ海峡域に形成された港市国家群では、マレー語でオラン・ラウトと総称された彼らが海軍力の中核を占めていた。

ビンタン島 豊かな水が中継港を成立させ、また島の水上交通路となった。



マラッカ王国の建国神話

は北スマトラのアル王国の港であった。パサイ同様アルも内陸部と緊密なネットワークを有し、ミナンカバウとも関係をもっていた。『王統記』は、マラッカ王室がシュリーヴィジャヤとゆかりのある存在として、スマトラ島の主要な産地や港と関係をもつにいたったことを唱えたのであった。これらの地からマラッカ海峡をへて産品がマラッカに寄せられたのである。

このマラッカ海峡において海上民は重要な役割をはたす。『王統記』は、王家がマラッカ海峡を統べる海の王の子孫であるとし、海との特別な関係を述べている。スリ・トリ・ブアナはシンガポールに建国するまでにパレンバンの有力者とビンタン島の女王の支援をえた。パレンバンの有力者の協力のもとにビンタン島に赴いたことを考えれば、この人物がムシ川河口からマラッカ海峡周辺で活動する海上民に影響力を行使していたことは容易に想像がつく。またビンタン島の属するリアウ・リンガ諸島は、マラッカ海峡にあつて古くから海上民の活動拠点があった。その地の女王の養子となり、ビンタン島の海上民も率いたスリ・トリ・ブアナは、シンガポールへわたるために荒ぶる海を制するこ

▼マジャパヒト王国

一二九三年元の干渉を排してラデン・ヴィジャヤが建国。東ジャワを中心に十四世紀から十五世紀前半期まで隆盛した。全盛期にはマラッカ海峡にも影響力を行使。十五世紀後半にジャワ北岸イスラーム港市の台頭により衰退し、一五二七年ごろ滅亡した。

▼スルタン・イスカンダル・シャー

この王は実在し、パラメシユワラのあとの第二代マラッカ王(在位一四一四〜一四二三頃)であった。その名前が示すとおり、ムスリムの王で、トメ・ピレスの記述によると、パサイ王家との交流によりイスラームに改宗したとある。この王の代になされたマラッカ王家のイスラームへの接近は、ただし一時的なもので、つぎのスリ・マハラジャ(在位一四二三頃〜一四四四)は非ムスリム名にもどった。『王統記』もこれを反映して、ふたたび非ムスリムの王が登場する。

▼ラジャ・トゥング

ここに登場するラジャ・トゥングはスルタン・ムハンマド・シャーは実在ではなく、『王統記』でものちにスルタンとなる実在のスルタン・ムザッファール・シャー(在位一四四五〜一四九四)の改宗をより正当化するために、この話を挿入したものと考えられる。

▼鄭和の遠征

十五世紀前半、明が周辺諸国にたいする朝貢勧告の目的で実施した艦隊遠征。雲南出身のムスリム鄭和を指揮官とし、主に東南アジア、インドへ派遣されたが、第四次遠征以降は、ペルシア湾、アラビア半島、アフリカ東海岸へも到達した。

▼朝貢

前近代の中国王朝と周辺諸国とのあいだに形成された政治的関係および貿易形態。朝貢国は、定期的に朝貢使節を中国の皇帝に遣わし貢物を献上。中国皇帝は、朝貢国の支配者を国王に封じ、朝貢側との貿易を許可した。

マラッカ王国の建国神話

023

産地および海上民との関係を形成したマラッカは、つぎに対外関係を確かなものにする必要があった。イスラームへの改宗はその一つであった。『ムラユ王統記』によると、スリ・トリ・ブアナの息子、孫、曾孫、玄孫の代、シンガポールは当時ここを勢力下においていたジャワのマジャパヒト王国からの攻撃を執拗に受けたという。その結果玄孫のスルタン・イスカンダル・シャーは、シンガポールからマラッカの地に移った。

マジャパヒトの勢力圏を離れたマラッカ王家は、イスカンダル・シャーの孫のラジャ・トゥングの代にこそってイスラームに改宗したと、『王統記』は伝えている。それによると、ラジャ・トゥングはある夜夢で、預言者ムハンマドと出会い、ムハンマドより、「アッラーのほかに神はなし、ムハンマドは神の使徒」を唱えるよう、命じられた。さらに、つぎの日ジェッタより船がやってき、マラッカに上陸する一人の人物のいうことに従うよう指示された。ラジャ・トゥングが同意すると、ムハンマドは消え去った。

目覚めると、ラジャ・トゥングはすでに割礼されており、彼から夢で教わった信仰告白が、ひとりでに唱えられるようになっていた。翌日、ムハンマドの

お告げどおりジェッタより船がやってきた。船からおりたサイード・アブドゥル・アジズの導きにより王は改宗し、スルタン・ムハンマド・シャーを名乗った。王について王家の高官や臣下もこれにならった。以降西アジアのイスラーム世界にマラッカの存在は広く知られるようになったという。

マラッカ王家が地元の人びとを引きつけた原理は、仏教や在地の信仰にもとづくものであり、パサイの場合と同じくイスラームとのあいだにギャップが存在した。それを媒介したのが、夢であった。『パサイ王国物語』のムラ・シルの場合と同じく『ムラユ王統記』のラジャ・トゥングの改宗も、夢での預言者ムハンマドの導きによるものであるとしている。

マラッカはまた、成立当初より北方のシャム(アユタヤ)の南進に悩まされていた。シャムの攻勢に対応するため、マラッカは中国との外交関係の樹立を始めた。明朝の一四〇五〜一三三年の七回にわたる鄭和の遠征を契機に、マラッカは中国と朝貢関係にはいった。

マラッカは熱心な朝貢国となり、その存在を中国から保障された。『ムラユ王統記』は、鄭和の遠征について直接ふれてないが、スルタン・マンスール・

マラッカ王国時代の王宮 『ムラユ王統記』をもとに復元。



マラッカの三宝公廟 鄭和は今日においても「三寶太監」の名で、東南アジア各地の中国系住民たちに信仰されている。



シャー(在位一四五九頃〜七七。『王統記』ではスルタン・ムハンマド・シャーの三代あとのスルタン)が中国の王女を嫁にむかえたことを語っている。また同じく彼の時代、中国皇帝がマンスール・シャーの足を浄める水をマラッカから贈ってもらい、それを飲むと病気がなおり、マラッカ王と中国皇帝との関係がいつそう親密になったと述べている。中国との関係の緊密化が『王統記』からも読み取れよう。

こうしてイスラーム世界と中国との関係を樹立したマラッカは、東西海洋交易の中継港としての地位を確固たるものにした。また東西交易における香辛料の需要の増大は、スマトラをはじめジャワ、モルッカよりもたらされる香辛料を求めてマラッカに來航する商人を増加させた。マラッカは十六世紀初めには一〇万人前後の人口を有する都市となっていたが、周辺にほとんど後背地をもたなかったこの港市は、食糧すら自給できず、米をアユタヤ、ペグー、ドゥマクなどから輸入した。商業立国のマラッカにとって、対外関係を安定的に維持することは極めて重要であったのである。

アユタヤ王国の建国神話

後背地と陸路で結ばれたパサイと、マラッカ海峡の海上民をとおして商業ネットワークを構築したマラッカをみてきた。他方で東南アジアにおける港市国家の多くは、内陸後背地と河川で結ばれていた。シャム湾にそそぐチャオ普拉ヤー川河口に形成されたアユタヤは、その典型である。アユタヤ王国(一三五一〜一七六七)の建国神話は、建国者が中国や周辺地域との関係を構築しつつ、大河を制する力をもつことを語る。

タイの前近代の歴史書には、仏教がいかにしてタイに伝えられたかを語る仏教歴史書(タムナーン)と、王都の建設に始まり、続いて歴代の王の治績が編年体で語られる王朝年代記(ボンサーワタン)とが存在した。現存するタイ語の王朝年代記のうちで最古のものは、十七世紀後半にナライ王のもとで編纂された『アユタヤ王朝年代記』である。しかしここでは、一六四〇年にアユタヤのオランダ商館に勤務したファン・フリートが収集したアユタヤ王国の建国から十七世紀なかごろまでの歴代の王の治績を語った『シーム王統記』[▲]を使用する。これは、仏教歴史書の語りと共通するものを持ち、当時のタイ人の世界観や王

▼アユタヤ王国 本書に登場するウートン王家をはじめ五王家から三代の王によって統治された王国。その間十六世紀後半にビルマのタウングー朝に占領されたが、ナレースワン王(在位一五九〇〜一六〇五)の時代独立を回復した。

▼『シーム王統記』 アユタヤ初代の王ターオ・ウートン(在位一三五一〜六九)から三代プラーサート(在位一六二九〜五〇)までの王の治世を述べたもの。歴代の王の名や在位期間は、『アユタヤ王朝年代記』と異なる箇所もあるが、中国側の『明実録』とは比較符合する。

アユタヤ王国の建国神話

註1)

- Teuku Iskandar ed., *De Hikajat Atjeh*, 1958, The Hague. (『トチイ国纂記』)
- T. Kato, *Marriage and Migration: Evolving Minangkabau Traditions in Indonesia*, Ithaca and London, 1982.
- W. Marsden, *The History of Sumatra*, reprint, Kuala Lumpur, New York, London and Melbourne, 1966.
- W. L. Olthof, trans., *Babad Tanah Djawi in proza Javaneische geschiedenis*, The Hague, 1941. (『ジャバ国纂記』)
- J. C. M. Radermacher, "Beschrijving van het eiland Sumatra, in zoo ver hetzelve tot nog toe bekend is", *Verhandelingen van het Bataviasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen*, vol.3, 1824.
- Anthony Reid, *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680*, 2vols, New Haven and London, 1988 and 1993.
- M. C. Ricklefs, *Jogjakarta under Sultan Mangrumbumi 1749-1792: A History of the Division of Java*, London, New York, Toronto and Kuala Lumpur, 1974.

図版出典一覧

- S. Abeyasekere, *Jakarta: A History*, Oxford University Press, 1987. 74
- H. Aveling, ed., *The Development of Indonesian Society*, St. Martin's Press, New York, 1980. 70
- J. Th. P. Blumberger, *De nationalistische beweging in Nederlandsch-Indië*, Foris Publications, Dordrecht, 1987. 78, 84
- De archieven van de Verenigde Oostindische Compagnie (1602-1795)*, The Hague, 1992. 8右中
- Del-Batavia Maatschappij 1875-1925*, Amsterdam, 1925. 72, 73
- T. R. Fell, *Early Maps of South-East Asia*, Oxford University Press, 1991. 36
- A. T. Gallop, ed., *Early Views of Indonesia: Drawings from the British Library*, University of Hawaii Press, Honolulu, 1995. 60
- L. Giebels, *Soekarno: Nederlandsch onderdaan. Een biografie 1901-1950*, Uitgeverij Bert Bakker, Amsterdam, 1999. 83
- J. W. Ijzerman, *De reis om de wereld door Olivier van Noort 1598-1601*, vol.1, The Hague, 1926. 8左下
- G. Knaap, *Cephas, Yogyakarta: Photography in the Service of the Sultan*, KITLV Press, Leiden, 1999. 59
- W. Marsden, *The History of Sumatra*, London, 1783. 8右上
- J. H. McGlynn, ed., *Indonesian Heritage: Language and Literature*, Archipelago Press, Singapore, 1998. 11
- E. Oey, ed., *Bali*, Periplus Editions, Singapore, 1994. 79
- L. P. van Putten, *Ambitie en onvermogen: Gouverneurs-generaal van Nederlands-Indië 1610-1796*, Uitgeverij ILCO-productions, Rotterdam, 2002. 68
- A. Reid, *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680*, vol.2: *Expansion and Crisis*, Yale University Press, New Haven, London, 1993. 32, 41, 43, 47
- G. P. Rouffaer and J. W. Ijzerman, eds., *De eerste schipvaart der Nederlanders naar Oost-Indië onder Cornelis de Houtman 1595-1597*, vol.1, The Hague, 1915. 40
- W. H. Scott, *Barangay: Sixteenth-Century Philippine Culture and Society*, Ateneo de Manila University Press, Manila, 1994. 82
- T. Suárez, *Early Mapping of Southeast Asia*, Periplus Editions, Singapore, 1999. カバー裏, 2, 4, 49, 81
- Surat Emas, Golden Letters: Writing Traditions of Indonesia*, The British Library, London, 1991. 11
- 著者撮影 3, 6, 8左上, 8左下, 12, 15, 16, 18, 19, 20, 21, 24右, 24左, 31, 34, 37, 38, 39, 40, 44, 45, 51, 52, 53, 55, 56, 59, 62, 64, 66, 71
- 著者提供 27, 29 コービス・ジャパン カバー表 世界文化フォト 扉

東南アジアの建国神話

2003年4月20日 1版1刷発行

2011年11月20日 1版3刷発行

著者：弘末雅士

発行者：野澤伸平

装幀者：菊地信義

発行所：株式会社 山川出版社

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-13-13

電話 03-3293-8131(営業) 8134(編集)

http://www.yamakawa.co.jp/

振替 00120-9-43993

印刷所：明和印刷株式会社

製本所：株式会社 手塚製本所

© 2003 Printed in Japan ISBN978-4-634-34720-5

造本には十分注意しておりますが、万一、

落丁・乱丁などございましたら、小社営業部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。